琉球大学学術リポジトリ

対話のある大講義の試み

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学教育センター
	公開日: 2018-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 道田, 泰司
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41085

対話のある大講義の試み

「人間関係論」担当　道田泰司（教育学部）

今回受賞した講義は，人文系科目「人間関係論」（受賞年の登録者数104名）です。この授業は，琉大赴任２年目の 1992 年度から毎年途切れることなく開講していますが，2007 年度から授業のやり方を大きく変えました。その矢先の受賞ですので，非常にうれしく思っています。

本稿では，私がどのような授業をしているのかをご紹介します。まだまだ作りかけの授業ですので，改善すべき点は多々あろうと思います。本稿をお読みの方から，今後への示唆をいただければと思っています。

あらかじめ説明しておきますと，2007 年度から授業形態を変えたときのコンセプトは「対話の場を作る」ということでした。そこで本稿でもその精神に則り，2007 年度受講生の一人に私にインタビュー（対話）をしてもらい，その文字起こし原稿を元に本稿を作成しました。また，たまたま最近，ある先生から授業について問い合わせのメールをいただきましたので，そこで返事として書いたことも含めてあります。

１．どんな授業なのか

――今の授業形態を改めて簡単に説明してください

まず，その日の課題を提示します。たとえば「性格検査はどのくらい信用できるのか」という感じです。この回の場合は，実際に質問紙法性格検査を 30 分ぐらい体験してもらって，それから５分ぐらい，教科書を読みながら一人で考えてもらいます。それから前後２列の４人ぐらいの即席グループで話し合いながらワークシート（図１）を埋めて自分なりの結論を考えてもらいます。これが 15 分ぐらいです。それから 10 人ぐらいを指名してそれを黒板に書いてもらって，それらにコメントをしながら私が 30 分ぐらい講義をする（図２）という形態です。

この中で，学生同士が話し合うという対話の場と，学生の板書に私がコメントしながら授業を進めるという対話の場を作っています。

――学生が授業を評価する観点って様々だと思いますが，この授業は学生に，どういう点を評価されていたのですか？

最後の授業のときの感想を見るといくつかあって，一つは「心理学っていう学問が自分の抱えている問題を考えるヒントになる」という心理学そのもののよさ，一つは「ビデオを見せたり，プリントにマンガを載せたりしている」というわかりやすくするための工夫，そして「グループで話し合って自分で考えるところ」という今回の授業で一番工夫している点ですね。「話し合い」っていうところが多くの学生に評価されてるといいなあと思うんですけどね。

――それ以前はどのような授業だったのですか？

たしか，ビデオを見せたり，プリントを使ってお話をしたり，・・っていう感じでしたね。性格検査の回で言ったら，質問紙法性格検査をやるところは同じだけど，その後はひたすら私が説明していました。いろいろと学生が興味を惹きそうなネタを仕込んで。

10 年ぐらい前の授業評価で学生が書いていることを見ても，「楽しかった」「きちんと考えることができた」「わかりやすかった」「興味がもてた」「色んな話が聞けた」「漫画をプリントにしたりとかして，内容が面白かった」「授業の雰囲気が和やか」と，評価は悪くなかったんですけどね。

でもときどき鋭いことを書く学生がいて，「大変緻密な授業計画が１時間ごとになされていたと思うが，そこに学生がいないという印象を常に覚えた」なんていう感想を書く学生がときどきいるんですね。

それで，時々学生にマイクを向けたりして，そういうインタラクティブなことは当時も目指していたとは思うんですが，でも，基本的にはこっちが喋ってばっかりで，やっている私のほうも授業が面白くない感じがしたので，昨年度から大きく変えました。

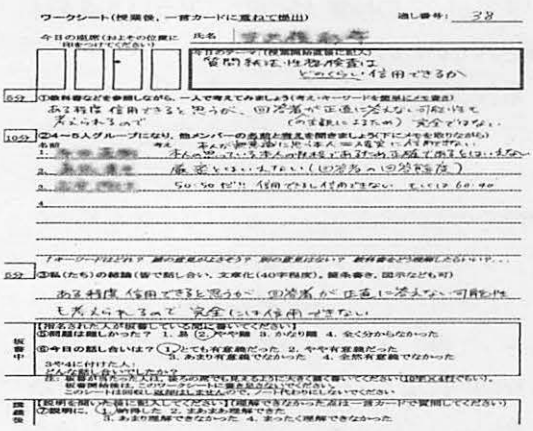

図1「ワークシートの例」

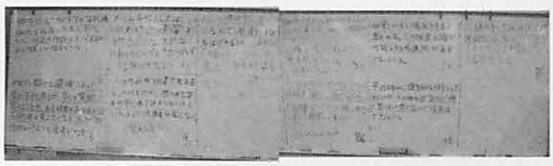

図2　受講生の板書とコメント

――どうして 2007 年からは，それまでと変えることができるようになったんですかね？

思い切ってやったらできたというところでしょうか。一つ参考にした授業はあって，法文学部の徳田先生が何年か前に，共通教育の授業でそういうのをやられていたというのを，うちのゼミ生から聞いたんですね。それはすごく面白かったと。そのやり方を参考にして，自分なりに組み立ててみました。あと，ここ数年附属小学校で授業を見せてもらうことが多いんですが，先生方が子どもたちの考えを引き出しながら授業をしている点もとても参考になりました。

2．どんな工夫をしているのか

――以前にやっていたインタラクティブなことって，今とはやり方が違っていたんですか？今は前後の２列で話し合い，とか決めていますが。

誰と話し合えとか，以前は指定はしなかったかもしれない。ちょっと隣近所と話してごらんみたいな感じで。そうすると，半分ぐらいの学生は話をしてるんだけど，話をしていないでボーッとしている学生も必ずいるんですよ。

それで 2007 年度からはどうしようかと思って，話し合うテーマを最初にＯＨＰで明示したり，ワークシートを作って毎回それを埋めないといけないようにしたり，話し合う前に自分の考えを作る時間をおいたり，話し合いの時間をグループで 10 分，結論をまとめるのに５分と毎回決めて学生がそれに慣れるようにしたり，話し合いの最後に何人かを指名して板書させることで，結論を作る必然性をもたせたりしました。おかげで以前よりは話し合いらしくなりましたし，今年は去年のやり方にもう一工夫加えたので，さらに話し合いが活性化するようになりました。

――もう一工夫とは？

口火を切る人というのを指定するんですね。２列で１グループになっているうちの，「今日は右前の席に座っている人から口火を切ってください」みたいな感じでいうんです。それを言ったら私も一通り教室を回って，各グループの右前の人に，「じゃあお願いねー」とか，始まってなかったら「ほら，君から言うんだよー。まず後ろを向いてごらん」とか，そういう声かけをしています。

あと今年は，毎回出席する学生が 80 人くらいでちょっと少なめだったので，３人グループができるんですね。そういうところは席が一個あいているので，僕もそこにちょっと座って，「今どんな話してるのー？」とか「難しい？」

とか，そういう声かけをして盛り上げるというか。そういうことをしたおかげで，去年よりは話し合いが活性化しているかなあ。だから，本当にちょっとした工夫で変わるのかなあと思っています。

――シラバスを書くときに意識していることがありますか？

特にないのですが，強いて言うならば，「備考」の欄に，前年度の受講生の感想を載せています。それは，授業評価アンケートの自由記述欄に書かれているような内容なのですが，それを見ることで，「擬似口コミ」といいますか，こんな授業なんだよ～ということが学生の言葉で伝わると，授業を選ぶ際の参考になるかと思ってやっています。もっともそれが効果があるのかどうかはわからないんですけどね。

――そうやってシラバスに書いても，授業の趣旨を知らずに登録する学生とかいますよね。

そうですね。特に私の授業は話し合いがあるので，人と話すのが苦手だしそれを克服しようとも思っていない，という学生には全く向いていないと思います。そこで，初回の授業でもその話し合いをしてもらっています。

といっても初回に心理学の具体的な話をしてもしょうがないので，人間関係論では「この授業に期待すること」を話し合ってもらい，指名して板書までしてもらいます。そして，「この授業は毎回こういうことするから，こういうのが苦手だなあと思う人は，他のクラスをとったほうがいいかもよ？」と伝えています。いくら前年度の学生からの口コミがあったとしても，イメージできないとしょうがないので，具体的に授業でやることを体験してもらっています。

3．授業に対する考え方

――この授業では，「対話」ということを重視されているようですが，先生にとって「対話」とは？

人と話をすることで，今まで考えなかったような考えに出会えたりだとか，人の話を聞くことで，自分自身が新しいことを考えられるようになったりすることですね，この授業の場合。

初回の授業で言うんですが，せっかくこの教室に100人もの人がいるのに，周りの人が何を考えているかもわからないままに先生の話を聞くだけじゃもったいないと思うんですよ。教室に人が集まって学ぶことの意味は，他の人の考えに触れたり，他の人に意見を聞いてもらえることにあると思うんですね。この授業では，せいぜい20分弱しかそういう時間はとれませんが，少しでもそういう機会がもてるといいなあと思っています。

対話を通して学ぶということは，「自分とは違う世界に触れることで，自分が成長すること」ではないかと思うんですね。受講生の感想の中に，「色んな人と意見交換をするので，自分だけの考えに留まらない」とか「自分だけでは思いつかない考えを聞くことができる」と書いてあると，授業の意図が伝わったようでうれしくなりますね。

――以前と比べて，教員として意識が変わったこととかありますか？

共通教育で，心理学の授業がどうあるべきかみたいなもの少し最近見えてきたかなと言う気がします。以前の授業内容は，本を読めば書いてあるようなことなんだけど，学生はあんまり本を読まないから，僕が本に書いてあるような知識の中で厳選したものを紹介することで，知識を身につけてくれればいいかなと思っていたんだけれども。

――今は，授業はどうあるべきだと思っているんですか？

既にある知識を先生のほうで噛み砕いて，学生刷り込むのではなくて，自分で教科書を読んで，自分で考えて答えを見つけ出していくとか，心理学と自分の日常生活とのつながりに気づい

てほしいというか。学ぶことは，自分の生活を豊かにするものでないといけないと思うんですね。そこら辺は多分，前からあったと思うけど，「自分で考えながら知識を獲得したり，自分なりの考えを作ったりする」ということを大事にしようと思っているところが，以前と少し違うところかなあと思います。

そうやって考えるための手助けとして，他人との話し合い（対話）を位置づけています。

――具体的には，共通教育科目で，先生の専門の心理学を通して何を伝えようとしていますか？

たぶん２つあって，１つは，自分の専門じゃない分野を学ぶことは結構面白いんだなあ，ということを知ってもらえるといいかなあ。特に心理学って，自分の日常を振り返ったり考えたりするのに役に立つと思うんですね。

もう１つは，心理学の教科書に書いてある結論だけじゃなくて，研究のプロセスを楽しんで欲しいですね。心理学は，実験とか調査とか，そういう実証をもとに作られているので，そのプロセスを知ってほしい。こんな実験をしてこんな結果になったから，研究者はそれを説明しようとしてこういう概念を作ったんですよ，という部分です。

心理学の教科書を見ると，そこはあまり重視されてなくて，たとえば「スキーマ」という概念がある，という説明がまずあって，それを使うと私たちの知覚とか記憶はこう説明できますよ，と概念先行の話になっていることがけっこうある。そうすると，それは学生にとっては「そういうものなんだ」って鵜呑みにするしかないわけですね。

そうじゃなくて，こんな実験をしたらこんな結果が出て，それを説明する概念として「スキーマ」などの心理学の諸概念は作られたので，そういう心理学をつくるプロセスというか，考えるプロセスというか，そういうことを知ってほしいんですね。

だから授業では基本的に毎回，心理学の代表的な実験や研究を取りあげて，それを教科書を通して自分なりに理解した上で，さらに私が板書にコメントしながら教科書にない話を付け加えることで，理解を深めてほしいなと思っているんですね。

そしてこの授業で得た「考える力」が，その後の大学教育で活かされるといいなあと思っています。